

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	新本 惣一朗															
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当																	
<p>論 文 題 目</p> <p>小学校高学年児童の身体活動が自己効力感及び体力向上に及ぼす影響</p>																		
<p>論文審査担当者</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">主 査</td> <td style="padding-left: 20px;">教 授</td> <td style="padding-left: 20px;">山崎 昌廣</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>林 光緒</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>関矢 寛史</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>准教授</td> <td>長谷川 博</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教 授</td> <td>上田 毅 (教育学研究科)</td> </tr> </table>				主 査	教 授	山崎 昌廣	審査委員	教 授	林 光緒	審査委員	教 授	関矢 寛史	審査委員	准教授	長谷川 博	審査委員	教 授	上田 毅 (教育学研究科)
主 査	教 授	山崎 昌廣																
審査委員	教 授	林 光緒																
審査委員	教 授	関矢 寛史																
審査委員	准教授	長谷川 博																
審査委員	教 授	上田 毅 (教育学研究科)																
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、小学校高学年児童を対象として、スポーツ実施状況が特性的自己効力感に及ぼす影響、および日常生活における身体活動が体力に及ぼす影響を明らかにしたものである。体力に関する研究においては、都市にある私立小学校児童を対象として、地方の小学生との生活環境、学校生活を含む日常生活における身体活動量、および学校体育の授業内容と体力との関係に焦点をあてて分析した。</p> <p>本論文は、6章から構成されている。第1章では、まず小学生の身体活動量を増加させることによる心理的および身体的意義を論じ、本研究の目的を述べている。特に、小学生の体力低下は、社会問題化していることもあり、これまでの体力増強に対する取り組みを詳述し、問題点を明らかにしている。</p> <p>第2章では、放課後のスポーツ実施状況と特性的自己効力感の関係を明らかにすることを目的とした。スポーツを実施している者は実施していない者よりも特性的自己効力感得点は有意に高かった。特性的自己効力感得点と強い関係を示したのは、スポーツの継続年数であり、これが長いほど得点は高くなった。さらに、スポーツ実施頻度およびスポーツをする目的が明確な者ほど特性的自己効力感得点は高かった。</p> <p>第3章では、生活環境の違う都市の私立小学校の児童と地方の公立小学校の児童を対象として、走力、投能力、持久力などの体力測定と比較を行った。都市と地方間で顕著な差が認められたのは、平日および週末の運動頻度、睡眠時間、およびテレビの視聴時間であり、いずれの項目も地方の小学校児童の方が高い値を示した。しかしながら、体力テストの持久力では地方の小学生の方が高い値を示したが、それ以外の筋力、柔軟性、投能力は都市の小学生が高い値を示した。また、体力の総合得点で判断すると、都市と地方の違いによる体力の差は認められなかった。都市の小学校は、休憩時間などを利用して運動するよう指導しており、さらに体育の授業においても体力が向上するプログラムを実施していたことから、学校生活において、身体活動量を増やす工夫の重要性が示された。</p> <p>第4章では、小学生の日常生活における、歩数、運動量、活動時間、総エネルギー消費量、歩行距離、および運動強度を測定し、どの要因が体力向上に強く影響を及ぼすかを明らかにし</p>																		

た。男子では、運動量と総エネルギー消費量が体力向上に影響することが示された。一方、女子ではこれらの項目に加えて、歩行距離が体力に影響する因子であることが認められた。女子は、運動をする者としていない者の運動量の差が大きく、運動しない者では普段の生活での歩行運動が体力向上にとって重要であることが示された。

第5章では、小学校高学年の体力向上における学校体育の役割を明らかにすることを目的とした。小学生の体育授業中において、継続的な上半身トレーニングを実施し、投能力、筋力、柔軟性などの体力に及ぼす効果について検証した。上半身トレーニングを行うことによって、男子は腹筋力、握力、投能力及び疾走能力の有意な改善が認められ、女子においても投能力、跳躍力などの成績が向上し、特に握力は有意な改善効果が認められた。ただ単に運動をさせるだけでなく、学校体育での授業内容を工夫することにより、小学校高学年の体力向上が期待できることが示された。

本論文は、小学校高学年児童の社会体育や学校体育などによる身体活動と、特性的自己効力感および体力との関係を明らかにしたものである。小学生の身体活動の意義を心理および身体的側面から明らかにした点は学術的に価値があり、また小学生の体力低下の要因を明確にしたことは社会的にも価値は大きいと判断され、審査員一同は、本論文の成果を高く評価した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。